



平成 30 年 9 月 3 日

佛教大学附属幼稚園

## 経験が世界を作る (L o k a)

園長 田中典彦

過ぎ去ってみると早いもので、もう夏休みがおわります。子どもさんたちとたくさんの経験をしていただいたことと思います。「こんなことをしたよ」「こんな所へいったよ」「こんなものを見たよ」って、目を輝かせながら話してくれることだろうと楽しみにしています。

大人になると夏休みにはいる前は、「あー、長い休み、どうしようかな」と思ったはずですが、でも過ぎ去ってみると「意外と早かったな」と感じるのだそうです。そして年をとってゆくと一日一日が、一年一年が早く感じるようになるといわれています。なぜでしょう？それはときめきが少なくなるから、つまり新しい発見や経験が少なくなるからだそうです。なんでも当たり前なんだと勝手に頭の中だけで処理をしてしまっているのです。知らない所へ行ってみると、行くときよりも帰りの方が早く感じられるようなものです。人生の折り返し点を迎えて、帰り道になってゆくののでしょうか。

子どもの感覚はちがいます。一日、一年は長いのです。人生の往路だからなのでしょう。つねに新しいものの発見なのです。「これなんだ？」「なんで？」「どうして？」。驚きと不思議さの心の連続なのです。加えて期待などで心がたかまり、はずむのです。だから蝶の変態を見ても、だんご虫を見ても、何を見ても興味津々なのです。とにかく自分がこの世に生まれる前からあるものは彼らには自然なのであって、驚くことばかりなのです。移り変わりながらあるものを移り変わりながらあるものとして見ているのです。そしてそこから連想の世界へと入ってゆくのですね。入っていくというよりは世界を作っていくと言った方がよいのかもしれませんが。絵本の世界のようなものです。残念ながら大人からすれば空想の世界ということになってしまうのです。

仏教ではこの世界はローカ (loka) と言われています。lok (見る、経験する) という動詞から導かれているもので、見えているもの、経験しているものを意味します。それが世界であるということです。本来は今見えている広がり、経験されている広がりが確実な世界なのですが、人間にはそれを積み重ねて、たもってゆく頭の働きがあります。それが知識とされるものなのです。そこでは見られたもの、経験されたものということとなります。実際には移り変わりながらあるものが固定化されてゆくのですね。そうです、当たり前化するのです。そうなるそこからはすでにときめきを得ることは極めて稀になってしまうのです。

人間には教育という営みがあります。わたしたちの一人一人の経験は一生をかけたとしてもそんなに広くはありません。時間的にも空間的にも限られたものです。自分の経験したこともない昔のことや、今という時間にあっても世界中の出来事を眼前にすることはできません。そこで人類が経験したこと、他の人の経験したことが知識として受け継がれることとなったのです。これが教育なのです。

いま素直な、純粋な眼でありのままを捉えている子どもさんたちも、やがてすぐにこの営みの中に入ってゆかれるのです。良く言えば教育を通して与えられる知識も一種の経験であるということとなるでしょう。そしてそれらの経験が一人一人の世界を構成するのです。

いろんなことに関心をもって、ときめいている子どもさんの今という時間を大切にしたいものです。そしていつまでもそのときめきを持ち続けてくれることを支えたいと思います。ご家庭においても、ともにときめきのある生活を。

